第1回総合計画審議会　議事要点録

Ⅰ　日　時　令和4年5月24日（火曜日）9時30分～12時00分

Ⅱ　場　所　長浜市役所3階　特別会議室

Ⅲ　出席者

鵜飼　修委員（会長）　岩嵜　博論委員（副会長）

山内　美和子委員　廣部　恭子委員　松居　弘次委員

中山　郁英　委員　川瀬　寛子委員　宮本　麻里委員

髙橋　康之　委員　前川　和彦委員　森川　ゆり委員

鳥塚　貴絵　委員　船崎　桜　委員

【オブザーバー】　堤　義定氏

【事 務 局】　福永総務部長、横田総務部政策監、森総務部次長
柴田政策デザイン課長、山﨑係長、伊藤主査、野村主査
池野主査、秋野主事

Ⅳ 内　容

１開会

２市長あいさつ

市　　長　　開催に当たりまして、一言ご挨拶申しあげます。

本日、皆さまには、大変お忙しい中、『長浜市総合計画審議会』にご出席いただき、ありがとうございます。また、日ごろは、市政各般にわたり、特別のご支援、ご協力を賜り、この場をお借りしましてお礼申しあげます。

皆さまには、委員へのご就任をお願いいたしましたところ、公私とも大変お忙しい中、ご快諾いただきましたこと、重ねてお礼申しあげます。

この審議会は、長浜市の今後4年間の総合計画基本計画について審議するものです。皆さまからは、この 4 年の長浜を形作るための意見や様々なアイデアを頂戴したいと思います。加えて、この審議会は次の 10 年にわたる基本構想を見据えたものにもなる、非常に重要なものであると考えております。

私は、２月の選挙で当選し、市長になりました。そこで、長浜市の人口減少数が県内で最も多いという現実を変えるためには、様々な分野での大改革が必要であると訴えてきました。その大改革の視点を今回の総合計画基本計画の中に盛り込んでいくことで、長浜市の発展を進め、人口減少を何とか食い止めたいと思っております。

そのようなことから、委員の皆さまの役割は非常に大きいものです。今回お集まりの皆さまは、様々な分野において大活躍いただいている方々です。皆さまの英知を結集して、今後の長浜を、今後どのような視点や考え方を持って、まちづくり施策を進めていけばよいか、様々なアイデアについて、ご提案をいただければと思います。

最後に、非常に短期間でご審議いただくことになりますが、ぜひとも活発に、

忌憚のないご意見、ご議論をいただきますことをお願い申しあげまして、ご挨拶とさせていただきます。

3 委員委嘱及び委員紹介

4 会長及び副会長の互選

事　務　局　　本来は委員の互選で定めるところですが、従前からの審議の経過もあり、事務局側の提案をもって就任依頼をさせていただきたいと存じます。会長には滋賀県立大学教授の鵜飼　修様、副会長には武蔵野美術大学教授の岩嵜　博論様をお願いします。

委　　員　　＜異議なし＞

5 会長・副会長あいさつ

会　　長　　女性の元気な活躍が、地域をよくすると考えている。

長浜には、多くの魅力的な地域資源と人材が揃っていると思うので、それらをいかに発展されていくかが重要である。また、地域のことをよく知って、地に足のついた活動をすることが大事だと思っており、それが長浜らしさを作ることに繋がる。

ぜひ長浜らしい総合計画の策定に向けて、ご意見をいただきたい。

副　会　長　　私自身、仕事と住まいは東京にあるが、心はやはり地元の長浜のことが気になり、これまでの経験から、日本や我々の未来は地域から新しいものが生まれることで拓けると思っている。

創造性を使って、地域や社会に貢献する人材を作ったり、研究をしたりする場にいるため、学術的な観点を踏まえつつ、日本や世界との観点で貢献できればと思う。

6 長浜市総合計画第3期基本計画等の策定概要について

事　務　局　　＜資料（資料3）＞に基づき説明

7 議事

（1）　長浜市総合計画第3期基本計画の策定に盛り込む事項について

事　務　局　　＜資料（資料4-1、4-2-1、4-2-2）に基づき説明＞

会　　長　　今日、これから出た意見をもとに事務局で素案を作成し、第 2 回の審議会で、

素案に対するご意見や追加で検討いただきたい事項を頂戴する予定である。
　では皆さまからの様々な視点でのご意見を頂戴したい。

委　　員　　私の住む地域でも、人口減少の傾向にあるが、U ターン者や移住者などの若い人も増えてきたと感じる。そこで、現在、地域の魅力を再発見して、この地域は「面白い」「魅力がある」と気づいてもらう取組を行っている。
　総合計画に、自分の住みやすさとは何かを考えながら、将来、どうすれば自分が地域に関わることができるかを考えるきっかけになる内容があればよい。

会　　長　　地域を面白くするにはどうしたらいいか。

委　　員　　面白くするには、自分達が楽しむ姿を見せて、地域や身の回りに何があるかを考えたり、住んでいるからこそ当然としていたものが、実は貴重な地域資源であることを知ってもらうことも必要である。
　また、地域資源をどのように外に PR していくかが大切である。

会　　長　　楽しさと暮らしやすさはどうしたら両立できるか。

委　　員　　難しい。私たちも悩みながら取り組んでいる。

会　　長　　人は暮らしやすくなければそこには暮らさない。
　楽しさと暮らしやすさの両立が重要で、外から見たときに、楽しさが伝わると、移住地候補になる可能性もある。楽しめるまちづくりが必要である。

委　　員　　国も人口減少に対して地域循環共生圏を提唱しており、人口減少対策には雇用が一番大事であると考える。
　ではその雇用をどうして作るかという中で、1つの方法として、再生可能エネルギーを地場産業にしていくといった取組がある。
　国が誘導している施策で、森林地帯での間伐材をバイオマスエネルギーにする発電施設を会社として立ち上げ、新しい雇用を創出する取り組みもある。米原はすでに動いている。
　長浜も、自伐型林業に取り組む地域おこし協力隊の募集をされているが、長浜の環境も守りながら活性化していく、雇用を創出していく視点があってもよいと考える。

会　　長　　今、自身が若い年代になれるなら何をするか。

委　　員　　フィールドへ入りたい。
　昔は環境の質を高める取り組みを行うことが主であり、資源やエネルギーについて社会の関心がなかった。今ならバイオエネルギー事業や再生可能エネルギーについて取り組みたい。

委　　員　　私は結婚を機に県外から余呉に来たが、余呉はとても子育ての環境が良いところであり、ここに来てよかったと思っている。
　しかし、将来パートナーに先立たれる時が来た場合、おそらく地域には単身の

高齢者が多く、買い物を含め日常生活をどうしていけばいいかという不安がある。

このような不安が大きくなると、転出や旧長浜への転居が想定されるので、将来歳を取っても安心・安全に暮らし続けられる整備、「未来の安心安全保証」が必要であると感じる。

長浜がどのようなまちになったらいいかを考える中で、子育てでブランクがある人やシニア世代、自分の好きなことや得意なことを仕事にしたい方など、様々な環境の人が、自身にあった働き方を選べる、提供できるまちになればいいと思う。

また、長浜は、スキルはあるが家庭環境で一日 3、4 時間しか働けないという女性が多いと感じるので、スキル面で人材不足を感じている企業とのマッチングを増やしていけば、長浜は「いろんな働き方ができて面白い」という印象が生まれ、子育て世代や若い人にも魅力に感じられる、長浜に住みたいと思うきっかけになるのでは。

また、子どものころから「長浜でこんなことをしたい」、「あの人のような大人になりたい」と感じることのできる、長浜で活躍している大人に出会う経験ができると、将来も長浜に住みたいと思ってもらえるのではないか。

委　　員　　現在、体験型観光に携わっており、長浜は、良い素材がありながら使いきれていないと感じる。また、耕作放棄地が多いことや、例えば余呉で開催されている山菜祭りなども、上手く活用できていないことが多く、流通や情報拡散、地域の連携をどうしていくかが課題である。

また、大雪の際に食材不足が発生し、地域での自給率を上げることの必要性を感じた。

事業を創造していくことも大切ではあるが、まずは眠っている体験素材や資源を掘り起こし、流通を作り、出口を作っていく、意図的に地域を循環させることが大切である。

範囲を大きくするよりも、小さいコミュニティーを形成して繋いでいく組織づくりを目指した方が上手くいくのではないか。

委　　員　　長浜には面白い移住者がいるということを市内外に紹介することで、長浜が注目されればと思い、女性移住者 8 人でチームを組み、本を出版した。

私は平均年齢 70 歳超の小さな集落に住んでいるため、何十年先の老後よりもまずは 10 年後を考える必要がある。その暮らしの中で感じることは、今は地域の人が草刈りや木の伐採をしているが、できる人がいなくなった場合どうすればいいかという課題がある。

人口減少に対応するには、①転出を減らす②U ターン者を増やす③Iターンを増やすことが必要である。Iターンを増やすことについては、何か目玉を作ると、注目してもらえると思う。

雇用を増やしたり、受け皿を増やすことは長期戦であると思うので、ターゲットを決めて狙いを絞った展開もよいのではないか。

例えば、長浜にはスキルを持ったフリーランスの女性が多いので、フリーランスに優しい、活躍できる町として PR するために、ポケット Wi-Fi の全額補助を出すなど、そういった簡単なところから始めて、それも見せ方次第では目玉になると思う。

また、市民意識調査の結果を見て、移住者を受け入れる環境づくりに対する市民の重要度が低いことがわかる。これは受け入れ側の意識が薄いという結果であり、その意識醸成ができればよい。

また、「移住者」の定義が難しいと感じており、現状長浜は「空き家バンクを使って移住した人＝移住者」としているが、長期的に移住者を増やしたいと思うのであればその定義で良いのかと思う。

会　　長　　フリーランスの労働組合ができるという動きもある中で、長浜の女性のフリーランスのネットワークで構成されているメンバーはどれだけいるのか。

委　　員　　ネットワークはなく、個人的な関わりがあるのみである。

会　　長　　組織化が良いとは思わないが、フリーランスが何人いるかが数値的にわかると、印象も強くなる。

委　　員　　県の事業で、市外の方も含め約 50 人のネットワークはあるが、全員がフリーランスではなく、将来的にフリーランスを目指している人も含まれている。

会　　長　　長浜だけで 1000 人ほどのネットワークはできないか。

委　　員　　男女合わせると可能性はあるのでは。

会　　長　　「長浜にフリーランスの人が多い」と伝えるよりも、「長浜には何人のフリーランスがいる」と数値で表すことができると注目が集められる。

委　　員　　六荘地域は若い世代が増えていて、人口の流出を肌で感じることは少ないが、子育て中の方とお話をする中で、長浜市に住むのをためらう声がある。その理由は、「長浜ではハイレベルな教育が受けられないため、都市圏の方が良い」というイメージによるものである。

一方、長浜に移住された方もおられる。その理由は、横断歩道で子どもが渡る際に車に対して礼をしたり、駆け足で渡ったりと礼儀がしっかりしている民度の良さに惹かれたとのことであった。

長浜は子育てする上で、このような子を育てる「良いところ」「地域のつながり」があるため、大切に残していきたいと思っている。

会　　長　　今のコロナ禍や少子高齢化はコミュニティーの形を変えるチャンスである。

委　　員　　市内を見ていて、空き家が増加し、お年寄りさえいない地域が増えたと感じる。

市民意識調査の結果からは、地元に愛着があっても、雇用が無いために人が減ってしまっているのではないかと感じる。実際に、長浜に戻ってきたい、子どもに戻ってきてほしいと思っている人は多い。また、空き家に移住計画をしている人の相談がここ 2、3 年で増えてきた。単に空き家対策をすれば良いということではなく、安心安全面や、防災関係を伴った施策が必要である。

会　　長　　空き家バンクについては、次のステップに進む時が来ていると感じる。どこの地域も似た取組をしているので、周囲を超える施策をしなければ魅力的にはならない。

委　　員　　市民意識調査の結果を見ると、文化の面の評価が低く残念ではあるが、長浜は文化的に魅力的なまちであり、20 年前ほどから創造オペラやミュージカルが上演されており、創造という点において、継続傾向があると感じる。

長浜が他市町と異なる点は、諸団体が連携して上手く運営を行っているということである。中でも、長浜出身のプロの方と、地元の合唱団やスタッフが一緒になって上演し、予算的にも持続可能な取り組みを行っているということは、県からも大変画期的であるという評価をいただいている。

文化分野は持続可能かどうかがポイントであると思っており、以前は、地域の様々な場所で展示やバレエ、講演などの芸術体験があり、今はタップダンスやミュージカル教室、合唱教室などの団体が多く存在する。

しかし、市からの補助が出る期間が3年であるため、事業が3年で終わってしまう傾向がある。行政の手を離れて補助が無くなった時にどう継続するかが課題であり、短期間ではなく、長期的な目線を踏まえた取組みが必要なのではと思う。

長浜は自分が主役になれる、輝ける場があり、そのような取り組みをどう続けていけるかが課題であり重要である。

また、フリーランスでネットワークをつくるという話があったが、文化面でも、ポータルサイトを作って、団体やイベントを紹介し、活躍できる場を創出していこうという動きがある。

また、農林水産の分野で水産に対する事項が少なく感じる。長浜は良い土壌があり、水産業に携わる方が多い。その中で不漁等の問題もあるが、県や市ではなかなかそれが取り上げられず、担い手の高齢化が激しく、担い手不足も大きな課題である。

長浜にはすでに水産資源があるので、その分野を普及させていくことができればよい。

会　　長　　水産資源を地域資源として定めて、活かしていくことは重要である。

文化については暮らしの豊かさに繋がると考えるが、それを継続していくために何か参考にできるものはないか。

委　　員　　ヨーロッパではどのような都市にも小さい劇場があり、有名な方が地元に戻

ってきて講演するのが当たり前である。このように、有名な方が地元と繋がりを持つことで、地元の人にとって憧れの対象になってもらうことも効果的ではないか。

会　　長　　持続可能性を担保するためにどうすればいいかなどを考える勉強会などができるとよい。

委　　員　　農業は、後継者問題が非常に深刻である。

また、高齢者が農地の管理を辞められるので、その農地を預かった側の仕事が増え、雇用募集を常に行っている。しかし、「やりがいがない、仕事がきつい、給料が低い」という点で応募がない。

また、高月地域では、野菜よりも米や麦が育てやすい土壌であると感じるため、米、麦、大豆などの 6 次産業を大規模に進められないかと考えても、一農家にはその加工までは難しい。そのため、地場産業として、長浜の農産物を使ってブランド化していけると雇用問題も改善されるのではないかと考える。

また新規就農者は、ハウス苺をされる方が多くなってきたが、苺が収穫できすぎて長浜で販売しきれず、どこで販売すればいいのかという問題が生じてくる。

そのため、長浜ブランドを作って、市外や県外へ向けた取り組みをしていかないと農業は衰退していく。

また、長浜でも麦茶の焙煎加工を行う工場ができたが、市内で栽培している麦が全て使えるわけではない。地域の人々に地場の食品を食べてもらえるよう、栽培から加工まで一貫してできるような産業を誘致してもらえるとありがたい。

市内転居について、高月地域は増加しているように見えるが、木之本や余呉、西浅井の方々が高月の国道沿いの便利なところへ移動しており、元々高月の集落に住んでいる若い人は旧長浜に移動している印象である。老後も安心して暮らせるということは、生活の便利さがあるかが重要であると思う。

また、市役所の手続きも、北部に住んでいる人も本庁舎へ書類を持っていかなければいけないという体制を変えていくべきである。一方、デジタル化を進めると、高齢の方はすぐに「無理」と言う。単純にデジタル化を進めるだけでなく、行政や近隣でデジタル化をサポートする体制が必要である。

会　　長　　栽培から加工まで一貫して行う産業は、彦根ビールのようにできないことはないが費用が大きい。この需要をどう創造するかがポイントになってくる。

委　　員　　雇用インフラをよりよくするためにマッチング等を行っているが、労働人口が減っていくことは変えられなくても、労働人口を広げていくことはできると考えている。実際に長浜でも、環境や体の変化で働けないといった人は多く、そういった人も働ける環境を周囲が作っていかなければいけない。そして、より多くの納税者を作っていかねば地域が循環していかない。

また、労働人口を増やしていくことは企業努力だけではできない。地域の支援や官民連携で動くことで、より多くの方々がやさしく働ける場を作っていくこと

が必要である。

また、環境経済、SDGs に力を入れている中で、人口減少に抗うことのできるエネルギーを作っていくことが重要である。人口減少が止められないままで本当にそれでいいのか、止める活動を作っていくことが、地域の活性化や人材育成につながっていくのではないかと考える。

また、環境をテーマに、産業界から長浜を選んでもらえるように、長浜の産業を育くみ、長浜の産業を守っていくことも必要である。しかし、環境と経済だけでなく、環境と教育、環境とくらし等の場で取り組めるものであり、子どもたちも環境と学びを意識することで、大人になった際に、地域や社会の環境を良くしていうという使命が生まれるのではないか。

環境を切り口にすることは、ちょっとした意識の変化から、市民全員が取り組むことができるテーマであるので、 一人ひとりが少し意識を持つことで変えていくことができる。

また、総合計画は長浜市に限らず、非常に広報が下手であると感じる。市民全員がいかにこの計画を自分事することが大切であるが、周知されにくい。

折角市として歩むべき道を計画で定めても、何人の市民がそれにそって歩んでくれるのか、何をするかも大切であるか、それをどう実現するかもしっかりと踏み込んで、この計画が多くの市民の手で実現していくことが重要である。

会　　長　　総合計画に市民と行政の役割が書かれているが、市民はそれを知らないと思う。市民が自分事として考えられるような情報発信が必要である。

委　　員　　人口減少がなぜ駄目なのかというと、「人口減少＝まちの元気・活力の低下」として見えやすいということがある。

まちの活力、元気は「①人口×②まちの参加率（まちに関わるか）×③活動の質や方向性（どんな活動をしているか、活動目的に対してどのような効果があるか）」の 3 つの要素の掛け算であると考える。

②のまちの参加率を高めるには、参加する機会をどのように作っていくかが大切であり、そのためには参加のプロセスを見直すことの検討も必要である。例えば平日の日中に行われる今回のような会議や議会もその一つである。

③活動の質を高めるには、新しいアイデアをどう生み出していくかを考え、地域にない視点を持つ人と協働していくことや、新しい風を取り入れることも必要である。

私の好きな言葉で、「アイデアがあれば深刻化しない」という言葉があるが、様々な課題に対して深刻に思えてしまうのはその課題に対して打つ手がないと思うからであって、その課題に対して「これをすればいいのでは、こっちはどうか」などのアイデアがあれば、そこまで深刻にならないという意味である。そのようなアイデアを生み出すためには、今まで参加していなかった人を増やしたり、今まで取り入れていなかった視点を取り入れることが必要である。

また、総務省研究会が、2040 年に公務員の数を半分にしても対応できるようにするという提言をした。行政に対して何を求めていくのかを考えていくことが必要であり、全てのことを行政に任せずに、地域に住んでいる人や企業との協働で、一緒にやっていく考え方を持つことも大切である。

また、具体的な活動のテーマとして、「教育と環境」が重要である。

教育は結果がでるまでに時間がかかるが大事なものである。若者の人口減少が激しいことを考えると、自治体で高校教育に対する活動をしていくことも必要ではないかと思う。市内の5つの高校それぞれに、個性的でいい教育をしていくために何ができるかを、県に任せるだけでなく、市としても考え、行っていくべきである。その内容については、地域との協働や繋がりから広げていける部分が多くあると思うので、飛び道具ではない、地に足の着いた取組を考えていく必要がある。

「環境」については、全体を貫くテーマとして掲げられると思っている。生活する中で、環境やエネルギーについては関わらずにはいられないものであると思うので、循環を一つのキーワードとして、お金を外に出さない 経済循環や、エネルギー関連で、現状市外に出て行っているお金をどうしていくかをどうしていくかを考える視点も大切である。

また、曳山まつりは非常に良い取組であり、小学生が舞台に上がり、周りの大人は見守り、支えるという流れが何年も続いている良い循環を生み出している。

そういった循環を生む仕組みの流れをどう作っていくかを意識していくべきであると思う。

会　　長　環境をベースにした視点で進めていくことは良いことであると考える。

委　　員　ジェンダーの防災について様々な話を聞いている中で、市の防災の備蓄品に関して問い合わせた際に、食料品については期限管理がされているが、おむつなどは期限がきているものもあるとのことであった。生理用品や介護用おむつなど、期限が切れているものを施設に配布できるようにしてもいいのではないか。

女性が将来高齢で単身になっても安心して暮らせるように、災害が来た時に誰がリーダーシップをとって地域防災を補っていくのかなども考えていかねばならず、「長浜市は最近災害がないから・・・」と油断してはいけない。

市民が安心安全に暮らせるには、防災面やジェンダー面で女性の意見が取り入れられるような会議や、女性の声が届きやすい長浜市になってほしいと思う。

会　　長　安心安全に暮らせるまちは大前提である。

副 会 長　「日本の未来は地域から」という言葉もあったが、数年前に冨山和彦氏が「日本は、G(グローバル経済圏)と L(ローカル経済圏)の2つの世界に分かれる」と提唱されていた。中でも、L の世界は、我々が自分たちでいかに地域独自の姿を作っていくかが問われている。それを顕著にしたのが新型コロナウイルス感染症

であると思う。

コロナは社会に大きな影響を与え、今後は、コロナ後の社会の有り方を考えなければならない。これまで、平成の常識は「利便性・効率の時代」であり、誰もが組織で働き、便利な場所に住む現象が日本全国で起こっていた。その流れは今後もある程度は残るが、令和の時代は自分の得意なことで仕事を作ったり、コミュニティーを形成したりして生きていく、「自立共生・創造の時代」であると考える。

委員からの意見にもあったように、「長浜は自分が主役になれるまち」である。例えば、彦根市は殿様が長くいた歴史もあることから、トップダウン型の風土があるが、長浜は殿様がいなかったこともあって町人の文化が強く、ボトムアップ型で自分たちで自分の未来を創るという風土がある。

その証拠が曳山祭りであり、プロの手助けを得ながら自分たちで作っていくオペラなどの芸術文化も同様である。

また、水産業、農業、6 次産業、担い手不足、環境、再生可能エネルギー、新しい産業の創出などの様々な地域の魅力や価値をいかに見いだしていくか、どう引き出していくかが重要で、関わりの面では、コミュニティーの単位を見なおして小さな地域の単位で考えていくのか、その 安心安全をどう確保していくのかが課題である。

例えば、これだけ車社会の中で、車に乗れなくなった人がどう生活してくかを考えた際の手段として、移動販売を見なさなくてはいけなくなるかもしれない。

小さな地域での自立した安心安全をどのように作りつつ、その独自性をどう磨いていくか、地域の魅力を発見していくか、それが結果的に仕事になったりシビックプライドや教育の醸成に繋がると思う。

最近、東京から軽井沢に移住する人が増えている。リモートワークが普及したことも一つではあるが、軽井沢風越学園という自立教育を目指す施設ができたことも要因であると思う。

教育の面でも、平成の IQ 追及志向から令和の自立・共生の志向へ変化してきたと感じる。

こういった令和の時代において、地域の魅力を積極的に外に出して、L の時代における特徴ある長浜をどう作っていくかが大事である。

市　　長　　長浜で活発に活動されている皆さんが日々考えている意見が、ほとばしるように出てきて、こういった良い意見を計画に反映していきたい。非常に贅沢な時間を過ごさせていただいた。

私の経験から踏まえても、やはり地域がそれぞれ力をつけていかねばならない。

現在の人口減少という危機の中で、日本の基礎となる各地域が力をつけて魅力あるまちをつくり、競争していくことが日本全体の活力の創出になると思う。そ

ういった意味で長浜は文化や製造、農業等、様々な分野で1番になれる魅力があるまちである。そして、個々の魅力を繋げて大きな面にしていきたい。

会　　長　　まちづくりのキャッチフレーズに「Challenge（挑戦）&Creation（創造）」を掲げておられるので、その挑戦を許容するまちになってほしい。

8 その他

事　務　局　　次回、第 2 回総合計画審議会の開催は、7月21日（木）午前9時30分からを予定している。

場所は本日と同様に長浜市役所3階の特別会議室で開催する。

9 閉会

以上